

第十六回

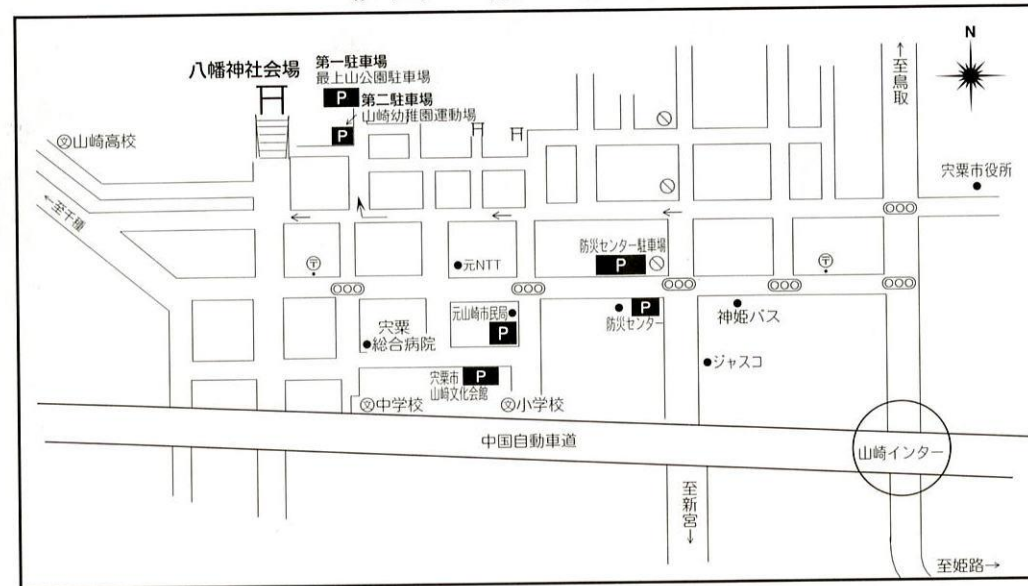
薪

能



山崎八幡神社奉納

《会場略図》



と き 平成21年9月5日(土) 【小雨決行】

と ころ 宍粟市山崎町 山崎八幡神社 能舞台
(台風等の不測の場合は宍粟市山崎文化会館)

第 一 部 宍粟市謡曲同好会 午後2時始

第 二 部 薪能奉納 午後6時始

主 催 山崎八幡神社薪能奉賛会

後 援 宍粟市・宍粟市文化協会・宍粟市教育委員会・神戸新聞社・宍粟市商工会・
宍粟市観光協会・龍野ロータリークラブ・山崎ライオンズクラブ・宍粟市
医師会有志・宍粟市歯科医師会有志・新潮会有志・昭和会有志・平成会有志

協 賛 宍粟市謡曲同好会

入場無料

事務局

山崎町山崎6 (山中医院内)

山崎八幡神社薪能奉賛会

TEL (0790) 62-0036

第十六回 山崎薪能の開催にあたり

昭和五十五年壺阪壽会長の下に元禄十二年創建の山崎八幡神社能楽堂を記念して、地元有志の協賛を得て始めた山崎八幡神社奉納薪能も二十九年を経て曲折を重ねながら、通算第十六回を迎えることができました。

山崎町の高台に境内の森に囲まれて天然のコロシアムを形成し俗世界の騒音を断ち、日本国の世界に誇る伝統芸能、能楽を今年も一流の能楽師を迎え鑑賞できることは誠に素晴らしいことではありませんか。

宍粟の山崎に根づいた、この伝統芸能を護る催しが未来永劫に続くことを願って、又、この事業に御協賛賜った西播磨の有志の方々に深甚なる敬意を捧げてご挨拶いたします。



山崎八幡神社薪能奉賛会

会 長 山 中 陽 一

第一部 穴栗謡曲同好会番組

(午后二時始)

一、山崎「ども能楽教室」

謡曲『高砂』他

二、連 吟・内山北露会

花 月
秋武 春生
伊藤 弘之
梶浦 忠志
内山 正作

三、連 吟・波賀翠謡会

千 手
清水 康廣
大成みちよ
松本 繁信
中田 勇

四、連 吟・山崎集杉会

杜 若
下村 弥 岸本 通哉
中谷 裕子 加藤 昭彦
吉川 宏美 塚田 清一
玉田 敬子 山中 陽一
山根 悠子 三谷 恭三
小泉 啓展 三渡 圭介

五、連 吟・池田掬水会

松 風
久宗 丑雄
柳田 薫
安田 武嘉
伊野 操治
大部 満男
シテ春名 一利
ワキ山田 雄三
上歌「恋草の」ヨリ

六、仕 舞・鶴崎観和会

蝉 丸 岸本 恵子
鐘之段 春名 芳子
笹之段 山國 重代
鶴崎 和美
鶉之段 永井由美子
野 守 田中 洋子

九、連 吟・山崎篠謡会

船弁慶
原 みち代
原 忠雄
山崎きよ子
上田 隆雄
進藤ヒデ子

七、独 吟・山崎福王会

砧 葭谷 驍

十、素 謡・秋田泉謡会

安達原 シテ 篠原 宗平
蒲田 哲子
小瀬七五三男
中坪 義治
進藤 千秋
中村 明
ワキツレ 中山 昌子
中村 清子

八、連 調・上田青耀会

(謡)
青山さよ子
酒井 悦子
酒井 健二
松浦 季子
目黒美保子
大倉 順子
(笛)
土蜘蛛
ワキ「その時一人武者」ヨリ
(太鼓)

第二部 薪能奉納

(午后六時始)

修 祓 山崎八幡神社宮司 根岸敬佑
能奉行舞台改め 薪能奉賛会副会長 鶴崎和美

觀世流 能 樂

大西礼久

杜 若 江崎金治郎

恋之舞

辻 芳昭 野口 亮
久田陽春子 上田 悟

後見

笠田昭雄 地謡 松野浩行 藤谷音彌
上田貴弘 水田雄輔 山田義高
寺澤幸祐 吉井基晴

火入式

挨拶 薪能奉賛会会長 山中陽一
祝辞 宍粟市長 田路勝
祝辞 兵庫県議會議員 高嶋利憲

大藏流 狂言

魚説 経 出家茂山千五郎 壇家茂山千三郎

後見 鈴木 実

觀世流 能 樂

杉浦豊彦

雷 電 江崎敬三

間網谷正美

辻 雅之 野口 亮
清水皓祐 上田 悟

後見

藤谷音彌 地謡 今村哲朗 水田雄悟
吉井基晴 今村嘉太郎 笠田昭雄
松野浩行 上田貴弘
齊藤信輔 寺澤幸祐

附祝言

閉会の辞 薪能奉賛会副会長 鶴崎和美

(終了予定 午后八時半頃)

※会場内での写真撮影・録画、録音は、堅くお断わりいたします。
また携帯電話の電源はお切りください。

お祝いのことば



宍粟市長 田路 勝

初秋の候「第十六回 薪能」が山崎八幡神社能舞台で厳粛かつ盛大に開催されますこと、心よりお祝い申し上げます。

山崎八幡神社能舞台は、大変由緒あるもので、元禄十二年に建立されたと言いますから、三〇〇年以上前に建てられたこととなります。平成十九年には、「山崎八幡神社」千二百年祭にあたり、能舞台も大改修され素晴らしい舞台に生まれ変わりました。

この舞台を主に昭和五十五年より開催されております「薪能」も今年で十六回目を迎えられるました。主催されており山崎八幡神社薪能奉賛会の皆さまを始め、関係各位に対し、心より敬意を表する次第であります。

薪能の歴史は古く、平安時代まで遡るそうで、野外に設置された能舞台の周囲にかがり火を焚き、そのなかで演じられる能で、神聖な神事・仏事の儀式として催されています。こうした伝統芸能は、時代の移り変わりとともに、近代化していく中で、忘れてならない祖先が残してくれた大切な宝とも言え、守り続けていただいている山崎八幡神社薪能奉賛会の皆さまには、改めて敬意と感謝を申し上げます。

この薪能の開催は、伝統的な文化や芸能に触れることの少なくなった私たちに、悠久の歴史の流れを感じさせてくれるまたとない機会であります。本日は、二部構成となっております、一部では、宍粟市謡曲同好会の皆さまによる謡曲・仕舞の披露、そして、二部では、薪能奉納となっております。今日は一日ゆっくりと幽玄と雅の世界に浸っていただきたいと思っております。

宍粟市では、地域に根差した芸術・文化活動を充実し、その保存と環境の整備を推進してまいりますので、今後とも、ご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、山崎八幡神社薪能奉賛会の今後益々のご発展と、関係各位のご健勝とご活躍を祈念し、ごあいさついたします。

お祝いのことば



兵庫県議会議員 高嶋 利憲

能には主役のシテ方と脇役のワキ方があり、その役割分担は明確に定められています。桂吉坊という米朝の孫弟子が日本を代表する十人の師匠に芸について質問したものを綴った読み物の中に、人間国宝であり名ワキ方の宝生閑氏とのやり取りを見つけました。

氏曰く「能の舞台は大掛かりな道具や装置がありません。なにもない舞台にワキが出てきて、場面設定をする。」「ワキが目立ちやうと、その場面が現実と重なってきちゃう、ワキがうまく存在を消して、シテのやりよいようにしなくてはならない。」

私たちは日常の様々な場面で、ある時はシテを演じ、ある時はワキを演じて生活をしているように思います。しかし、誰しもいつもシテを演じるわけにはいかず、大抵はいざという時のシテ役のためにワキに甘んじることが多いように思います。実際世の中、シテばかりの世界は窮屈でトラブルが絶えないでしょうし、ワキばかりでは世の中の方向が定まらないまま浮遊してしまいうように思います。自分の置かれている立場を理解すること、シテとして振舞える状況にあるのか、ワキに徹してシテを引き立てる役目なのか、役割分担の的確な把握こそメリハリの利いた望ましい生き方だと能が教えてくれているように思えます。

続けて氏曰く「シテ役はワキのために出てきちゃうわけですよ、お客さんの前に出てきていくわけではなく、ワキのためにいろいろな話をしてくれる。」シテのためにワキに徹することはワキのためにある、ワキの醍醐味を語る名ワキ方はすでに立派なシテに見えます。

山崎薪能の季節がやってきました。今宵は夢幻能の世界に身を委ね、在原業平や菅原道真公の気配を感じられるかもしれません。

あらためて山崎八幡神社薪能奉賛会の皆さんに心より感謝し、お祝いの言葉を申し上げます。第十六回薪能上演誠におめでとうございます。

演目解説

観世流

能楽 杜若 かきつばた

諸国一見の僧(ワキ)が、都から東国へ下る途中、三河国、八ツ橋のほとりの沢辺に、杜若が美しく咲いているので、思わず足をとめ、見とれています。すると里の女(シテ)があらわれ、ここは古歌に詠まれた名所であり、昔、在原業平が東下りをした時も此処で休み、(かきつばた)の五文字を、各句の頭において「からころも きつつなれにし つましあれば はるばるさぬる たびをしぞおもふ」という和歌を詠んだという故事を教えます。そして、旅僧を自分の家に案内し、泊まってゆくようにすすめます。やがて女は、初冠に唐衣を着てあらわれたので、僧は驚いて女の素性を尋ねます。女は、自分は杜若の精であると明かし、『伊勢物語』について語り、また業平は歌舞の菩薩の化現であるので、その詠歌の功德により、非情の草木である自分も成仏したと告げ、そして報謝の舞をまい、やがて消えてゆきます。

大蔵流

狂言 魚説経 うお ぜつ きょう

摂津の国兵庫の浦に住む漁師は殺生が嫌になり出家したが、俄坊主なので経も読めず説経もできない。やむなく都へ上り勤めをみつげようと海道へやってくる。そこで道連れになった信心深い男は、持仏堂で法事をしてくれる僧を探していた。お互いの望みが一致したので、男は俄坊主を連れ帰る。さっそく、説経を頼むと、俄坊主はもと漁師にふさわしく説経をはじめますが……。

観世流

能楽 雷電 らい でん

比叡山の僧、法性坊は菅原道真の師であった。天下のため護摩供養をしていると道真の霊があらわれ「自分は冤罪で左遷され死にいたったので、雷となって内裏に行き恨みをはらそうと思う」と述べる。そして「朝廷は悪霊退散のために法性坊を招くだろうが、もし呼ばれても参り給うな」と願う。法性坊は「比叡山は天皇の祈願所であるため、三度勅使が来たら断れない」と答える。それを聞いた道真の霊は、本尊の前に供え



てあったざくろを噛み砕き、寺の戸に吐きかけると扉は燃えあがった。法性坊が法力で消し止めると、道真の霊は走り去る。ここまでが前段である。後段は内裏で雷となった道真の霊が暴れまわり、法性坊の法力と対決する。最後は朝廷から「天神」の神号をおくられ、礼を述べて黒雲に乗り立ち去る。



演者紹介

○印は重要無形文化財(総合指定)保持者

シテ方(観世流)

今村哲朗	今村嘉太郎	松野浩行	寺澤幸祐	水田雄晤	齐藤信輔	藤谷音彌	○笠田昭雄	○吉井基晴	○山田義高	大西礼久	○笠田稔彦	○杉浦豊彦	○上田貴弘
大西家	大西家	林家	井上家	大槻家	大槻家	上田家	上田家	吉井家	上田家	大西家	上田家	杉浦家	上田家
大阪在	大阪在	京都在	大阪在	大阪在	堺在	神戸在	神戸在	西宮在	姫路在	大阪在	神戸在	京都在	神戸在

ワキ方(福王流)

江崎敬三	江崎金治郎	江崎家	江崎家	姫路在	姫路在
------	-------	-----	-----	-----	-----

狂言方(大蔵流)

○茂山千五郎	○茂山千三郎	○網谷正美	○鈴木実	京都在	京都在	京都在	京都在
茂山家	茂山家	茂山家	茂山家				

囃子方

久田陽春子	○清水皓祐	○上田悟	○辻芳昭	辻雅之	野口亮	大倉流小鼓	大倉流小鼓	大倉流大鼓	大倉流大鼓	大倉流大鼓	大倉流大鼓	森田流笛	大阪在	大阪在	大阪在	大阪在	大阪在	大阪在
-------	-------	------	------	-----	-----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----

八幡神社奉納新能の記録

7	6	5	4	3	2	1	回
3 ・ 9 ・ 21	1 ・ 9 ・ 16 <small>平成</small>	62 ・ 9 ・ 26	60 ・ 10 ・ 5	58 ・ 10 ・ 1	56 ・ 10 ・ 24	55 ・ 10 ・ 4 <small>昭和</small>	年月日
經 <small>觀世流</small> 正 指 吸 雅 之 助	菊 慈 童 江 崎 金 治 郎	翁 <small>觀世流</small> 觀世元正 三番叟 茂山千五郎 千才 觀世清和	弱 法 師 江 崎 正 左 衛 門	三 井 寺 浦 田 保 利	鉢 <small>觀世流</small> 木 江 崎 金 治 郎	羽 <small>觀世流</small> 衣 江 崎 金 治 郎	演
瓜 盜 人 網 谷 正 美	呼 聲 丸 石 や す し	二 人 袴 木 松 村 正 雄	昆 布 売 伊 藤 忠 三 郎	水 掛 聲 茂 山 千 五 郎	瓜 盜 人 茂 山 あ き ら	柿 山 伏 茂 山 正 義	目
安 達 原 江 崎 金 治 郎	石 橋 中 藤 村 彌 三 郎	狸 々 乱 江 崎 金 治 郎	葵 上 江 崎 金 治 郎	小 鍛 冶 江 崎 金 治 郎	紅 葉 狩 江 崎 金 治 郎	土 蜘蛛 江 崎 金 治 郎	

15	14	13	12	11	10	9	8
19 ・ 9 ・ 1	17 ・ 9 ・ 3	15 ・ 9 ・ 6	13 ・ 9 ・ 1	11 ・ 9 ・ 4	9 ・ 9 ・ 6	7 ・ 9 ・ 2	5 ・ 9 ・ 11
西 王 母 江 崎 金 治 郎	張 <small>觀世流</small> 良 江 崎 金 治 郎	藤 <small>觀世流</small> 戸 江 崎 金 治 郎	卷 <small>觀世流</small> 絹 和 田 英 基	高 <small>觀世流</small> 砂 江 崎 金 治 郎	安 <small>觀世流</small> 宅 江 崎 金 治 郎	吉 野 天 人 江 崎 金 治 郎	鶴 <small>觀世流</small> 龜 指 吸 雅 之 助
伯 母 ケ 酒 茂 山 七 五 三	貰 <small>狂言</small> 聲 茂 山 千 五 郎	伯 母 ケ 酒 佐 々 木 千 吉	寝 音 曲 茂 山 千 五 郎	萩 大 名 松 本 千 五 郎	素 袍 落 茂 山 千 五 郎	蝸 牛 阿 草 一 德	口 真 似 木 丸 村 正 雄
正 尊 江 崎 金 治 郎	船 弁 慶 江 崎 金 治 郎	殺 生 石 是 川 正 彦	俊 寛 江 崎 金 治 郎	井 筒 江 崎 金 治 郎	岩 船 江 崎 金 治 郎	野 守 中 村 彌 三 郎	土 蜘蛛 江 崎 金 治 郎

◆能の略式演奏◆

半能

後シテの登場部分だけを上演する。
ファイナーレとして添える場合が多い。

袴能

面、装束を用いず、紋服、袴のまままで舞われる、すがすがしい夏の能。

舞子

一曲の主要部分を紋服、袴で、地謡と囃子によって舞うもの。

仕舞

一曲の一部分を地謡だけで、紋服、袴のまま舞うもの。
能のデッサンである。

番囃子

謡と囃子だけで一曲を演ずること。つまり音楽部分だけの演奏である。

素囃子

器楽だけで、登場楽や舞を演奏するもの。

一調

謡手ひとりや鼓ひとりで曲の一部を演奏すること。
難しいものとなる。

一調一管

一調に笛の役の加わったもの。

一管

笛だけの独奏。

無謡一調

鼓ひとりだけの独奏。

素謡

ひとり、または数人で一曲を通して謡うこと。

連吟

曲の一部分を数人で謡うもの。

独吟

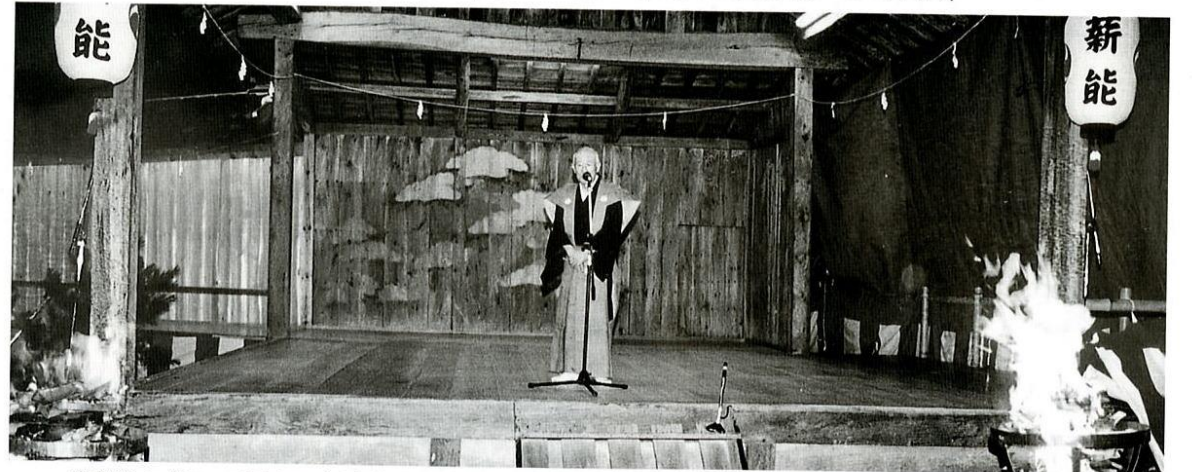
曲の一部分をひとりで謡うもの。

小語り

いわゆる物語の部分を一ひとりで語るもの。

小舞

能の仕舞にあたる狂言の舞。能のように一曲の一部でなく独立した小品である。



当舞台に於いて旧くは山崎藩主本多公の奉納薪能又、昭和55年より平成19年にかけて奉賛会による薪能が15回にわたり開催されました。

300年余の風雪にたえて尚建立時のたたずまいを十分にしのばれる長い歴史をもった由緒ある舞台でしたが、老朽化が著しく、平成19年に大改修工事を施した結果、新装なった舞台は入母屋造り、3間四方の本舞台に後座・地謡座・橋掛りを備え、鏡の間を兼ねた約18坪の楽屋を併設するものです。

【お知らせ】

山崎八幡神社薪能奉賛会を支える宍粟市謡曲同好会では、謡曲・仕舞の稽古を各社中で行なっております。稽古をご希望の方はご連絡下さい。初心者大歓迎。見学だけでも結構です。

連絡先

秋田泉謡会	大谷 正之	七二〇一五八
池田掬水会	伊野 操治	六二一六〇〇
内山北露会	内山 正作	七四一〇〇三
鶴崎観和会	鶴崎 和美	六二一〇一四七
波賀翠謡会	大成みちよ	七五―三五二三
山崎集杉会	塚田 清一	六二一〇〇六一
山崎篠謡会	原 忠雄	六二一―二八七九
山崎福王会	葎谷 驥	六二一―二七四六

(五十音順)

ご協賛者ご芳名

宍粟市文化協会様	大成 みちよ様
宍粟市商工会様	宇田 渡様
龍野ロータリークラブ様	伊野 操様
山崎ライオンズクラブ様	樽岡 祐様
鹿島建設株式会社様	藤井 慧乗様
江崎福王会様	(株)竹川鉄工所・竹川光郎様
姫路薪能奉賛会様	中坪 義治様
新宮福王会様	大谷 正之様
金井信治様	進藤 千秋様
玉田眼科・内科医院様	篠原 宗平様
庄清様	長田 正宗様
栗山章様	笠波 友江様
石野哲男様	兵庫県神社庁宍粟支部様

能 薪 祝

※八幡神社奉納の第十六回薪能の開催に当りまして、いつもながら格別の御理解、御協力を賜わり、厚く御礼申し上げます。なお、折角の御厚意にも拘らず、日程等の都合もあり、十分な打合せもできません、広告記事に不備が多々ある事と存じます。また、編集後に戴いた分が掲載洩れになっていることもあります。この点悪しからずお許しのほどお願い申し上げます。